上智大学言語学会　第 29 回年次大会
午後の部シンポジウム講演要旨

タイトル：　Case theory and the syntactic status of “ga”

講　師：竹沢　幸一

要　旨：

日本語のいわゆる主格の「ガ」はいくつかの異なった統語的環境（major subject, subject, and nominative object of stative predicates）に現れることが生成文法の初期から指摘され、その扱いは GB 理論以降の日本語統語論において重要な問題を提起してきた。Takezawa (1987)ではそうした異なった「ガ」の出現に対して GB 理論の観点から統一的な分析を与えることを試みたが，そこではガの出現は Tense との構造的な関係に基づいて決定されることを主張した。

本発表では，これまでの生成文法における「ガ」の分析を振り返るとともに,「ガ」の統一的分析が最近の理論的枠組みにおいてどのように捉え直せるのかを考える。また「ガ」に見られる neutral description と exhaustive listing の意味的対立(Kuno 1973)が構造上どう反映されるのかを nominative object の場合も含めながら検討する。

【講師紹介】

竹沢幸　一（たけざわ・こういち）
筑波大学　人文・社会科学系教授。　Ph.D.　(University of Washington)
主要研究テーマは、統語論（格，叙述，テンス/アスペクト，品詞論，等)。
著書・編書・論文に『日英語比較講座　格と語順と統語構造』(研究社),『空間表現と文法』(大修館), ''Perfective *have* and the bar notation'', *Linguistic Inquiry* 等